

# 新しい公共空間を開く 田尾陽一『飯館村からの挑戦——自然との共生をめざして』

中島 隆博

## 飯館村

原発事故で汚染される以前の飯館村は実に美しい村であった。「日本で最も美しい村」のひとつで、そこで育てられた飯館牛は絶品であった。妻の実家が福島市にある縁で、福島はわたしにとっては第二の故郷であり、その故郷が地震によって被害を受けただけなく、放射能で汚染されたことは、痛恨の極みであった。

その飯館村に、3・11の一年後、小林康夫さんと一緒に行った。UTCP（東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属 共生のための国際哲学研究センター）では、震災直後に「カタストロフィの哲学」と題して、震災に向き合いそれをともに考えるシリーズを始めていた。それを知ったフランクフルト大学の関係者から、UTCPのリーダーである小林康夫さん宛に、

撮影したりしながら歩いていると、若い警察官の集団に誰何された。よほど怪しい二人に見えたのだろう。ひとしきり尋問を受けた後に、ふと彼らが高知県警から派遣されていることに気づいた。好奇心から逆に尋ねたところ、各地から応援で警察官、特に若い警察官が被災地に派遣されていて、たまたまその配属先が飯館村だったとのこと。わたしの第一の故郷である高知の警察官たちと飯館村で出会うとは思いもかけず、小林さんとこの「偶然」について、川面をながめながらひとしきり語つたのであった。

## 新しい公共空間を開く

次に飯館村に関わったのは、本書の著者の田尾陽一さんのおかげである。そのきっかけとなつたのは、IHIS（多文化共生・統合人間学プログラム）の教育プロジェクト2「共生のプラクシス——市民社会と地域という思想」で「福島における地域共同体の再生の思想」という活動を構想したことによる。東北学院大学（現在）の松谷基和さんに相談を持ちかけたところ、田尾陽一さんが飯館村で「ふくしま再生の会」を立ち上げて活動しているので、連絡をしてみたらとのアドバイスをいただいた。早速、お電話を差し上げたところ、「二時間以上にわたって話が弾み、ハンナ・アーレントに触れながら、新しい公共空間としてのNPO（New Public Organization/Openness）として「ふくしま再生の会」を構想したのだとおっしゃつた。この理

“Comparing Fukushima and Chernobyl: Social and Cultural Dimensions of the Two Nuclear Catastrophes”といふシンポジウムへの招待が来た。放射能汚染の現場に行かずして参加することはできない、という小林さんの強い信念を受けて、わたしはなぜだか飯館村に行くことを提案したのである。幸い、その当時はすでに飯館村への道は通行できるようになつており、みぞれまじりの空模様のもと、飯館村にはあつけないほど難なく到着した。その途中で、山際の墓で御法事をなさつている人々目にした。決して放射線の値が低いとは言えない状況でも、心をこめて祈りを捧げている人たちがいること、そしてその人たちが集まるべきは「この場所」であることに、心を打たれたのである。

飯館村に入り、フランクフルト大学でのシンポジウムのために、ガイガーカウンターで計測したり、ビデオカメラで風景を

念については、この本の中でも次のようにあらためて述べられている。それはアーレントの「活動」を深く闇与的に解釈したものもある。

私たち福島に関わる者にとって、生産活動は農業・畜産業・林業などであり、制作活動は祭・太鼓・アート・新しいイベントプロデュースなどであり、協働活動はコミュニティづくり・草刈り・田植えと稲刈り・芋煮会などだ。

当初から、ふくしま再生の会の行動指針を「現地で／継続して／協働して／事実を基にして」とし、組織原則を「新しい公共空間の創造」「自立して思考する諸個人の集まり」だと言つてきたことは正しかつたのだ。（三二一頁）

アーレントが階層的に分類した労働・仕事・活動を、田尾さんは活動activityに包摂し、その意味づけを変更することで、価値を創造する新しい公共空間を開こうとしているのではないだろうか。

田尾さんとの長電話の後、IHISのメンバーと一緒に飯館村を訪ねたのが二〇一六年二月であった。東京からの新幹線の車中で、田尾さんからレクチャーを受けるところから始まり、福島市到着後、妻の実家のある福島市松川町（松川事件のあつたところ）に設置された松川第一仮設住宅を訪ね、飯館村から避難されている方々と交流の機会を得た。その後、飯館村に向か

## 飯館村からの挑戦

自然との共生をめざして



CHIKUMA SHINSHO

ちくま新書  
1540  
装幀：間村俊一  
新書判・320頁・940円+税  
筑摩書房・2020年

い、「ふくしま再生の会」の活動を目の当たりにした。この日と翌日の二日間にわたる活動の詳細は、中村彩さんのブログ報告に丁寧にまとめられているので、ご関心のある方はこちらをお読みいただければ幸いである ([https://ihs.c.u-tokyo.ac.jp/ja/schedule/reports/post/2\\_160223\\_fukushima\\_01/](https://ihs.c.u-tokyo.ac.jp/ja/schedule/reports/post/2_160223_fukushima_01/))。

### 田尾陽一さんの講義

飯館村での「ふくしま再生の会」の思想的にも開かれた活動を目の当たりにして、これは是非東大の学生にも広く知つてもらおうと、田尾さんに東大での講義をお願いした。ひとつはP.E.A.K（教養学部英語コース）の授業で学部生に英語で、もうひとつはI.H.Sの授業で大学院生に日本語でお話いただいた。前者は、主に文学において震災とりわけ福島の被曝がどう表現されているのかを扱った一連の授業であり、そのなかで田

尾さんの講義は、文学が指摘する社会的想像の変更の具体的な実践として学生に受け取られていたと記憶している。後者は、「地域」という概念をどうアップデートしていくのかを考える授業で、都会にとっての田舎や、中央にとっての地方とは異なる、「地域という思想」の新たな可能性を模索するもので、やはり田尾さんの実践は、そのひとつの手がかりとして受け止められた。本書でも二三二頁から二三五頁にわたって言及されている。実は、当時I.H.Sでは、農学部の小林和彦先生とN.P.O法人「古瀬と自然の文化を守る会」の活動にご一緒させていただいて、つくばみらい市にある古民家を拠点に「地域という思想」を展開していた。その古民家は茅葺きで、その茅を刈っていたのが、高エネルギー加速器研究機構（KEK）の敷地であった。これまた偶然であるが、田尾さんはこのKEKに深く関わっていたのである。

は、ただちにインターネットを使って物理研究者たちと相互通信を開始した。（三六頁）

田尾さんは四歳の時に広島におり、爆心地から九キロ離れたところで原爆を目撃している。そして学生時代には核物理学を学び、「大学院時代は高エネルギー物理学を専攻し、「原発は絶対安全だ」と断言した原子力工学の教授に強く反発した記憶がある」（八頁）という。

そうすると、田尾さんにとって飯館村と関わることは、若い時の宿題を、猛り狂う晩年ににおいて今度こそ成し遂げるという意味もあるのかもしれない。そしてそれは、田尾さん個人の宿題ではなく、戦後日本社会の宿題であることはいうまでもない。

### 科学主義を超えて徹底的に測る

測ることは難しい。それは、何をどう測るかを決定することと自分が難しいことに加えて、その決定をどう測るかが問われてくるからだ。根源的な決定不可能性がまとわりついていて、なかなかよい落ち着き場所はない。たとえば「学力」。まるである個人に「学力」が備わっているかのようにみなして、試験によってそれを測ることを、日本やその他の社会は当然のようにみなしている。しかし、もし個人ではなく個人の間の繋ぎ方、あるいは個人を横断して知を励起する力を「学力」だと考えるならば、それをどう測るのだろうか。個人の努力に「学力」を

帰属させることの影は相当に深い。

では、放射線の測定はどうだろうか。測定された放射線量とその推移の発表をしばらくの間ずっと気にしていた。自分でもガイガーカウンターを購入して、福島の家の周りの放射線量を測定しては、その数値の大きさに衝撃を受け、できる範囲での除染を試みたことを思い出す。問題はその数値の意味をどう理解するのかについて、科学の側からの説明が多く的人に届かなかつたことだ。「リスク」という確率を、人々は理解してくれないと科学者は嘆いたのだが、多くの人々が感じ取っていたのは、これまで経験したことのない、自分たちの生の条件そのものが大きく毀損されていくという事態に対し、従来の科学が前提にしてきていた条件設定とその上での確率計算がそもそも当てはまらないのではないか、という実に科学的な理路であった。しかも、さらに悪いことに、放射線量に関するデータがあ

## 日本を解き放つ

小林康夫・中島隆博

四六判・四二四頁・三五二〇円

## 東大エグゼクティブ・マネジメント

1 心と存在 2 言語と倫理

東京大学出版会（表示は税込価格）

まく出てこない、あるいは信用が置けないことが重なった。わたし自身も見ていたのはドイツの気象庁のデータであり、日本のものではなかった。

「ふくしま再生の会」は、こうした状況で、飯館村の人々の科学的な理路に答えるべく、飯館村の人々とともに放射線量を徹底的に測り、しかもただ測るのではなく、毀損された生の条件を回復するための手がかりにしたのである。具体的には除染であり、しかも山林の除染に手をつけなければならないという確信であった。

飯館村の除染のカギは山林にあると言つても過言ではない。しかし、その広大さと作業の困難さゆえに、行政も専門家も思考停止に陥り、「山林の除染は不可能」という結論から先へ進めていないよう見える。(八三頁)

ここで指摘されている「思考停止」に多くの人々は苛立つていたのであり、その背景にある「神話化された科学主義」(マルクス・ガブリエル)を拒絶していたのである。この点で、田尾さんたちの活動は、科学にもう一度その開放性(Openness)を取り戻すものだと言えるだろう。

### 人間が生きる

二〇一六年一〇月に、「ふくしま再生の会」の第一三回活動

避難後の人ととの出会い、私たちが味噌をつくり、凍み餅をつくり、またこうして報告会に参加させていただいた方々との出会いが、ひとつの大きな宝になりました。その宝を十分に發揮しながら、あの美しい村の再生に老いの身ながら、第一歩を踏み出したい。それは希望、放射能に侵されて避難させられた中での生活になんも希望はなかつたけれども、今、その希望の一点を見出すことができました。よつちやんと一緒に帰ります。(二五三一五四頁)

「人間が生きる」ことを避難先でことん考えられた菅野榮子さんは、「帰りたい」という思いをお持ちの菅野芳子さんと一緒に飯館村に帰ることを決意された。「一人では生きられないけれど、二人では生きられる」。そして、「人間が生きることに希望があるとすれば、人々と出会うなかで、ともに何かを作つたり、報告をしたり」という「活動」にこそある。

この報告会の現場にわたしもたまたま参加させてもらつていてが、菅野榮子さんだけでなく、飯館村の方々の言葉に、身体全体が揺さぶられ、共鳴しあうこと、止むことがなかつた。

そしてこれこそ田尾さんがなんとか実現しようとした新しい公共空間にほかならない。今後も「ふくしま再生の会」の理念的かつ実践的な挑戦に期待とともに、その意義を理解した上で、新しい公共空間があちこちに開かれていくことを信じたい。

(なかじま・たかひろ 中田哲学)

報告会「これから五年 飯館村村民の思い」が東大の農学部で開かれた。農学部で開かれたというのは、田畠の除染や放射線量の高いなかでの新しい農業の取り組みを、飯館村と東大農学部が一緒に行っていたことが背景にある。

さて、この報告会だが、飯館村の方々が五年間を振り返りながら、ご自身の言葉を紡ぎ出していたのが大変印象的だつた。こういう言い方をするのが適切かどうかわからないのだが、その言葉は実際に鍛え抜かれていて、硬質な概念となつて輝いていたのである。そのなかで、菅野榮子さんの言葉を紹介したい。

原発事故には感謝しませんけれど、この原発が事故を起こして、私たちにこの重荷を背負わせてくれたことによつて、そのかけがえのない「生きる」「人間が生きる」ことに対する貴重な経験をさせていただきました。これからも、残された人生を生きていかなければ私たちはなりません。孫や子供には私は遺言状は書けないと思つてます。(二五一頁)

また私も「終の場所は飯館村」と決めた人生でしたので、あの山川の姿ときれいな空気と清らかな水の流れとせせらぎと、この頭の中に刻み込まれております。よつちやん〔菅野芳子さん〕と一緒に村に帰ることに決心しました。

一人では生きられないけれど、一人では生きられる。(中略)